今一度反省を

本所臼井建設　江見もりえ

機関紙〝みいけ〟九月一六日付の第一ページ、熊大入院中の宮島さんの写真を見て、いたましさがこみあげてきます。

三池災害でおとうさんを、ご主人を、お兄さんをなくされました方々の姿がまたしても想い出され、胸のいたむ思いがいたします。

私たちは一日として忘れてはいません。しかし、ともすれば自分本位になりがちではないでしょうか。

子どもを大学、高校へやるためには、毎日金・かね・カネとあくせく夫婦共稼ぎをしてもたらぬのが現状です。女は家庭を守ることが一番大切であり、また子どもたちの幸せをねがうのが親の義務でもあります。

学問させることは第一条件として親は協力し、ねがわくばよい転につけたいと思うのが親心です。それとともに子どもは親にはわからぬが、いつのまにか横道にそれていることもしばしばあることを、けっして私たち母親は忘れてはなりません。子どもを上の学校にやることが親の責任だと信じることも大切ですが、子どもの心をよくみつめることが親の道ではないかしらと私はときどきそう思います。

そして父親のない家庭にするほどみじめなものはないのではありませんか?。さいわい災害をまぬがれた私たちは、いま一度〝自分たちはこれでいいのか〟とじっくりと反省しようではありませんか。

あすはわが身となるかもわからぬ現実をみつめて、内転も大切であることはわかりますが、ここで本気でがんばらねばならないとしみじみ思います。〝かけ声〟だけではできません。真剣にとりくみましょう。

三年忌を迎えて思う

臼井分会　谷鈴子

先日、私は入院中のCO患者の奥さんにはじめてお話する機会をもつことができました。その若い奥さんは、はじめはいまのような大変なこととはちっとも知らず「ときがたてばなおるんだ」くらいに思っていたところが、だんだんようすがわかり驚きと絶望にうちひしがれたとのこと。

ただ単なる同情と興味本位にしかとられないんだということで、あまりほんとうのことを知らせたくなかったそうです。

しかし、政府・会社の保安サボによって起きた事故で主人は一生〝廃人〟だというのに、三年たった来年の一一月には治療の完全保障もしないで労災保険法に基づいて、とり扱い一切がうち切られようとしているいま家族の将来に対する不安と苦しみ、怒りで、なんとしてでも、たとえ廃人同様の主人をつれて日本中をまわってでも政府・会社に対する責任追及を明らかにしたいと切実に訴えられました。

戦後、世界にも例のない前近代的な炭じん爆発で、一瞬にして四五八名もの尊い命をうばわれた忘れることのできない一一月九日が再びめぐってこようとしています。

そのごつぎつぎと起った炭鉱災害で北炭夕張、日鉄伊王島、山野の仲間たちら一、〇〇〇名もの人が合理化の犠牲によってムシケラのように殺されており政府、会社はこれらの問題をマスコミによってできるだけ他にそらせるようなことをやり、世間でも炭鉱災害は〝やむをえないんだ〟と忘れ去られようとしています。

三年忌も間近かな現在、昨年九月七日代表七名で「殺人罪」と「鉱山法違反を犯した罪」で告訴をしたのに、いまもって検察庁はこれを裁判所に起訴しようとしないことは、あまりにも無責任だと思います。

かつて三池斗争中、私たちは脱落した市会議員の奥さんにむかって「清き一票をかえせ」といったばかりで逮捕されたのと比較し、ほんとうに矛盾していると思います。私たちが斗争中に知ることのできた国家権力の正体をまざまざみせつけられた思いです。いまなお三六名の主婦たちは五年もの間、真実を追及して斗っている姿に私は救われる思いです。

いま〝三池と安保〟のようにCO患者の立法化の問題と遺家族の生活の保証を斗いとることをひろげないかぎり、まだまだ血にまみれた石炭が三池から掘り出されるでしょう。

天高く、意気揚がる
馬渡地域運動会

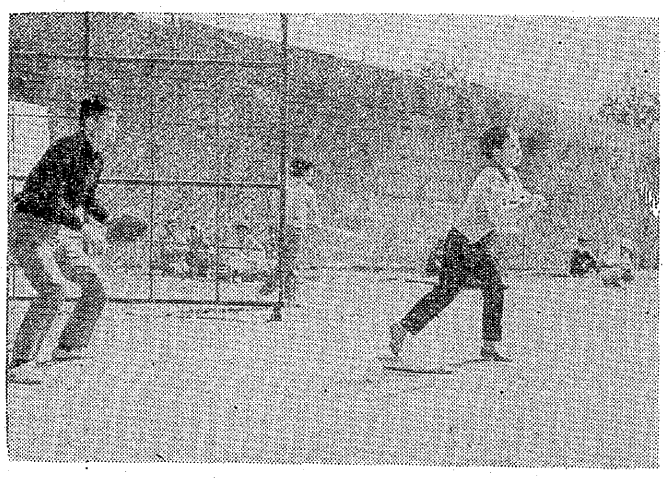
澄んだ秋空の下で、一〇月二四日、天道小学校運動場において、第四回目の勝立馬渡地域分会の運動会が行なわれました。

三池斗争後、毎年定期的に運動会を催す馬渡地域分会では、優勝旗、優勝カップまでそろえられ、今年はどの班が優勝旗をにぎるかが、話題の一つになっている。

家族ぐるみ、幼児から老人まで競技に参加し、底抜けに明るい笑いの中に、湧き出る斗いのエネルギーがひそんでいる。

競技種目も創意工夫がみられ、競技する方も応援するみんなも一体となった。ともに斗う仲間ならではの運動会であった。

上・馬渡運動会
下・青婦部球技大会



青婦部球技大会　10月24日青婦部球技大会は、大牟田南高校グランドと体育館で行われた。多数の参加者でソフトボール、バレー、卓球、テニス、ドッチボールで若さを発散させた。

遺族のその後
青婦部でハッスルする

本所上田征子さん

三池大変災で一家の大黒柱である父を失った上田さん（二一才）は、病気がちの母と現在高校二年と中学一年の二人の弟の生活を背おうことになった。

母は災害後三井がつくった下請のアソニット工場に出ていたが、身体がもたず、現在病気で寝たり起きたりの生活である。

三九年三月二日、本所経理に父の入れ替え採用で入った上田さんの仕事はパンチオペレーター（賃金計算）です。「私の賃金は月一五、〇〇〇円くらいで、弟の高校の学費は組合から奨学資金を借りていますが、母の病気も国民保険だから半額負担だし、生活をきりつめても、わずかばかりの父の退職金も生活費に使い、だんだん残りすくなくなっています」と語っています。

新しい職場にもすこしはなれてきたが、ここに出るまえに中小企業にしばらく出ていた上田さんは「中小の家族的な雰囲気にくらべて全体的に冷たい。仕事はいそがしいし残業がある。それに残業や日曜出勤がすこし強制的になっています」

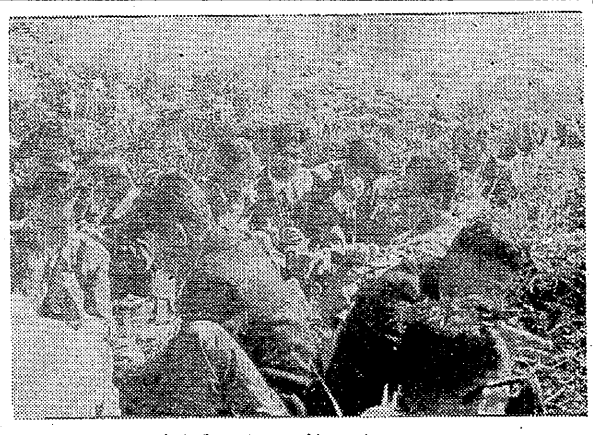
父の想い出も、病気ひとつしない健康さで、山に行ったり魚つりが好きでよく出かけていました。いい父でした。あんなふうに突然死ぬなど思いもしなかったし、それだけに会社に対しては「ほんとうにくしみを感じます。これから絶対安心して仂らける職場にしてほしい。四五八名も殺して、そのごなんら反省していない会社のやり方は卑劣です」

三池斗争のきびしさを体験していないから組合組織というものがよくわからないという上田さんも青婦部の財政部長をひきうけてハッスルしている若い娘さんです。

「組合でみんな集って旅行にゆくことは楽しいし、先日も福岡でおこなわれた反戦集会にゆくと多くの仲間がいることを知り、勇気を感じます。しかしどうしても、組合というと固苦しく考えがちだから、もっとみんなが集って話をしたいと思います。他の遺族の人たちはどうしていらっしゃるのだろうと思います。ひとりぼっちにならないように、職場でも組合でも地域でも、みなさんともっと話しあいたい」と語っています。

大三バルブ
大地評へ加盟

中立的立場をとってきた、大三バルブ労仂組合協和会は、内外共に緊迫した情勢の中で、共に斗うことを誓って、九月一日大地評に加盟した。同時に総評全金労組にも加盟し、新名称を、総評全国金属労仂組合大三バルブ支部（組合員一〇三名）とよぶ。共にがんばろう。



本所支部雲仙旅行へ

例年行われる本所支部統一行事は10月17日雲仙へバス旅行をした。

参加者 315名で絶好の秋日和にすばらしい山々の紅葉に日ごろの苦労を忘れる一日であつた。

高校生がみた
三池炭鉱〔2〕

法政高校　二年一一組

以前とは問題に対する態度が、まったく変化していました。そしてわれわれは次のことを学んだのです。まず問題意識をもつことである。

次にその問題を「なぜ」「どうして」と掘りさげて本質をつかむのだ。その場合、頭の中だけでするのではなく、「実際に行動し、自分の身体でもって」確かなものにするのである。行動していく中でこそ発展があるのではないか。

とにかくいろいろな意味でわれわれのグループは大きな変化をした。特に七カ月もの長い期間であったことに意味があると思う。

日本の石炭事業の歴史
（三池炭鉱の歴史）

石炭はいつごろから日本人の間に知られていたでしょうか。それは、すでに徳川時代初期のころから「燃える石」としてその存在をみとめられていました。しかしそれがマニファクチュア経営の基盤となったのが瀬戸内海の製塩用炭でした。塩をつくる釜が改良されて、それに石炭が使用されたのでした。実に、文政年間（一八〇四～一八三〇）のことでした。これ以来石炭の経済的な価値がみとめられることになったのです。ところが、これに目をつけたのが当時の藩であった。その産地の諸侯は藩の財政を確保するため、この民間人の経営を藩が取りあげて藩営とし、それをまた、石炭問屋、廻船問屋に委託販売させたのだった。そして開国までこの石炭問屋はわずかながらも基礎ができあがっていたのだった。この方法で特に筑豊は黒田藩が、そして三池炭鉱は柳河藩がその典型であった。

当時、日本のまわりの国際的環境は、英米のアジア進出にともない、まず中国（当時の清）が植民地として門戸をあけさせられていた。そうしてそういう状態の中で日本は歴史的変動のなだたるものである「明治維新」とともに、急速に国力を高めつつあった。政府が当時、まずとった政策は「富国強兵策」で、その名の示す通り日本従来の諸産業の育成に政府みずから積極的に努力した。そして、その産業の中に石炭産業が入っていたのです。

その当時の政府産業育成の仕方は、まず従来の産業に対して政府が大きな資本を投入して、ある程度その産業が自立できるようになると、それを投資された額からくらべるとまったく、タダ同様の価格で、当時の小生産者たちを掌握していた問屋に払い下げしたのだった。石炭産業の場合もまたしかりで、工部卿伊藤博文と三井の益田孝との間で「三池炭委託販売契約」がまとまり、かくてここに三井物産の発足をみるにいたったのである。

この三井物産が後に成長して、戦前の三井財閥として、そして戦後の三井独占資本グループとなったのである。とにかく、日本が植民地とならなかった理由はいろいろあるが、政府のこのような富国策によって日本の経済的地盤を早めにかためたのもその要因の一つである。さて、石炭産業は、多少経済的変動はあったが急速に成長していった。石炭産業自体も大きな石炭カルテルなどとして成長していた。

さて、生産が上昇をたどったのもいろいろな要因はあるが、まず採炭技術の進歩があげられる。